

平成29年木造建築士試験

試験場	受験番号	氏名
	—	

問題集

学科III（建築構造）

学科IV（建築施工）

次の注意事項及び答案用紙の注意事項をよく読んでから始めて下さい。

〔注意事項〕

1. この問題集は、学科III（建築構造）及び学科IV（建築施工）で一冊になっています。
2. この問題集は、表紙を含めて14枚になっています。
3. この問題集は、計算等に使用しても差しつかえありません。
4. 問題は、全て五枝択一式です。
5. 解答は、各問題とも一つだけ答案用紙の解答欄に所定の要領ではっきりとマークして下さい。
6. 解答に当たり、適用すべき法令については、平成29年1月1日現在において施行されているものとします。
7. 解答に当たり、地方公共団体の条例については、考慮しないことにします。
8. この問題集については、試験終了まで試験室に在室した者に限り、持ち帰りを認めます（中途退出者については、持ち帰りを禁止します）。

学科Ⅲ（建築構造）

〔No. 1〕 木造建築物に作用する荷重及び外力に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 床の単位面積当たりの固定荷重は、一般に、床梁の張り間(スパン)が小さいほど小さい。
2. 固定荷重は、建築物を構成している構造材や仕上材等による荷重である。
3. 積載荷重は、建築物を利用する人や建築物に配置される家具等の物品による荷重である。
4. 基礎に作用する外力には、土圧、水圧、地震力等がある。
5. 多雪区域ではない一般の地域における積雪荷重は、長期に生じる荷重として考慮する必要がある。

〔No. 2〕 木造建築物に作用する地震力及び風による水平力等に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 建築物に作用する地震力は、同規模・同形状の建築物の場合、一般に、鉄筋コンクリート造建築物より木造建築物のほうが小さい。
2. 2階建ての建築物に作用する地震力は、一般に、2階部分より1階部分のほうが大きい。
3. 地震力及び風による水平力に対する検討は、建築物の張り間方向及び桁行方向のそれぞれについて行う。
4. 風による水平力の大きさは、建設地、屋根の形状、建築物の断面及び平面形状、建築物の高さ等によって異なる。
5. 軒やけらばに作用する風圧力は、一般に、屋根面に作用する風圧力より小さい。

〔No. 3〕 木造建築物における部材の名称とそれを使用する部位等との組合せとして、**最も不適当なもの**は、次のうちどれか。

1. 振れ止め ————— 小屋組
2. 稲子^{いなご} ————— 天井
3. 下見板 ————— 外壁
4. さし梁 ————— 出窓
5. 親柱 ————— 軸組

〔No. 4〕 地盤又は木造建築物の基礎に関する次の記述のうち、**最も不適当なもの**はどれか。ただし、基礎については構造計算は行わないものとする。

1. 三角州は、一般に、細かい土粒子が堆積しているので、地震時に液状化を起こしやすい。
2. 洪積層は、比較的新しい時代に堆積した土層であり、一般に、軟弱である。
3. 布基礎は、地盤の長期許容応力度(地耐力)が 70 kN/m^2 以上であり、かつ、不同沈下等や基礎に損傷を生じるおそれがない場合、無筋コンクリート造とすることができる。
4. 布基礎の立上り部分の厚さは、15 cm以上とすることが望ましい。
5. 基礎杭を鋼管杭とする場合、杭の肉厚は 6 mm以上、かつ、杭の直径の $\frac{1}{100}$ 以上とする。

〔No. 5〕 木造軸組工法による2階建ての建築物において、土台又はアンカーボルトに関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

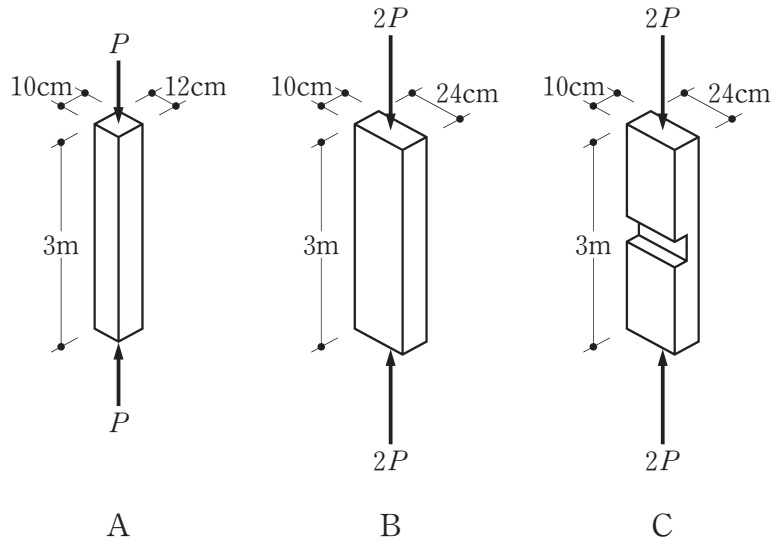
1. 建築物に地震力や風による水平力が作用すると、土台には曲げ応力が生じる場合がある。
2. 土台は、柱脚部を連結し、上階からの荷重を基礎に分散させる。
3. 同じ大きさの鉛直荷重が作用する柱の土台への埋込み量は、一般に、土台の材端部より材中間部のほうが大きくなる。
4. アンカーボルト(M12)のコンクリートへの埋込み長さは、250 mm以上とする。
5. 筋かいを設けた耐力壁の両端の柱の下部に近接した位置には、アンカーボルトを設ける。

〔No. 6〕 木造軸組工法による建築物の横架材又は柱に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 小屋梁に丸太を用いる場合、所要断面寸法は、丸太の元口寸法において確保する。
2. 梁の横座屈を防止するためには、梁せいを大きくするよりも、梁幅を大きくするほうが効果的である。
3. 最上階の柱の上部をつなぐ部材で、屋根荷重を受けないものを、頭つなぎという。
4. 柱の断面寸法(小径)は、横架材間の垂直距離に対して、建築物の規模、用途及び重量等を考慮して決定する。
5. 構造耐力上主要な柱の所要断面積の $\frac{1}{3}$ を欠き取る場合は、その部分を補強する。

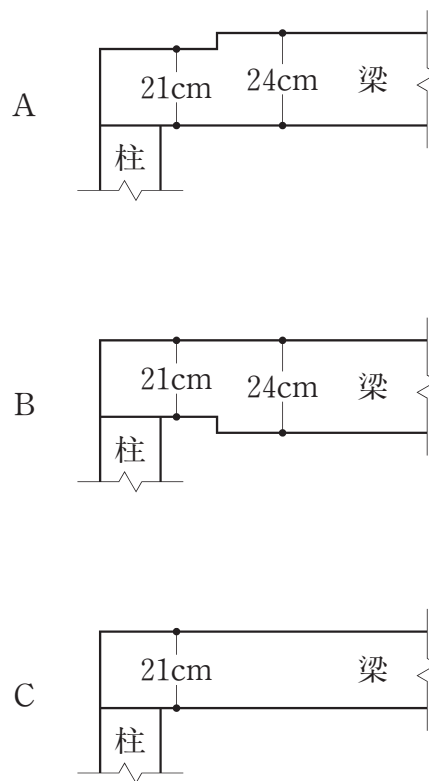
[No. 7] 図のような両端から荷重 P 又は $2P$ を受ける木造の柱A、B及びCの座屈のしにくさの大小関係として、正しいものは、次のうちどれか。ただし、全ての柱の材質、支持条件は同一とし、荷重は図心にかかるものとする。

1. $A = B > C$
2. $A > B > C$
3. $B > A = C$
4. $B > A > C$
5. $B = C > A$

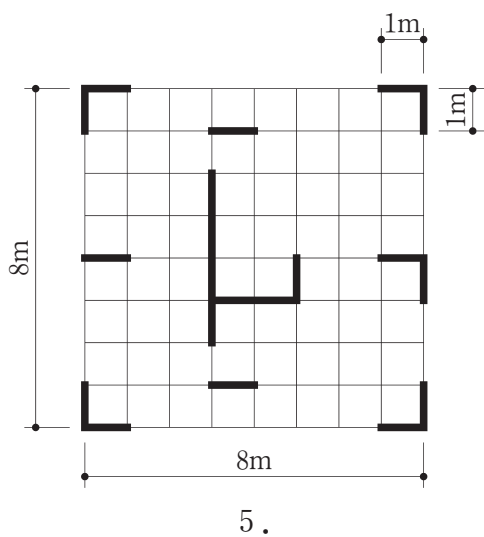
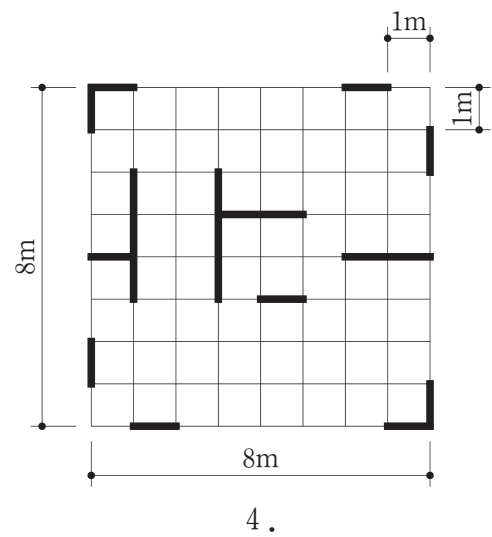
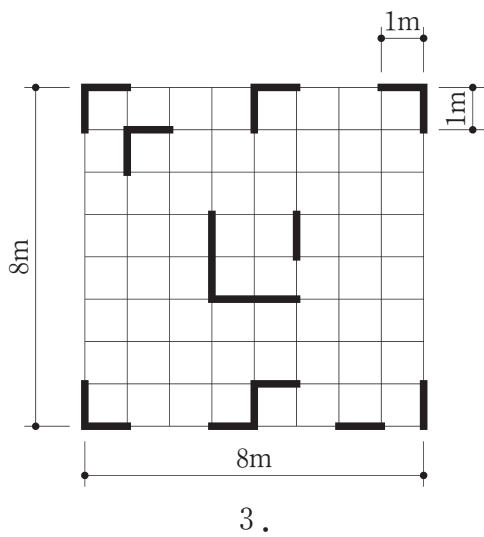
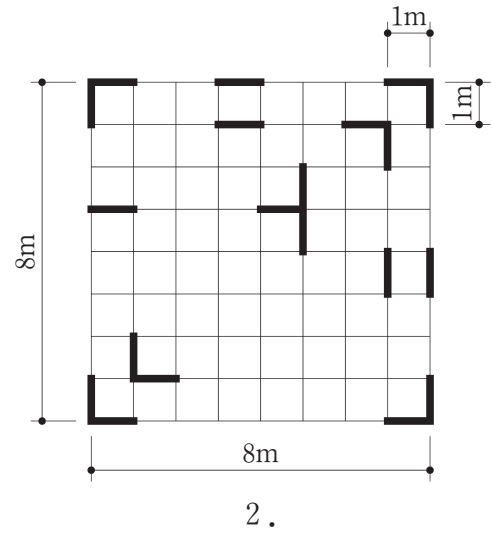
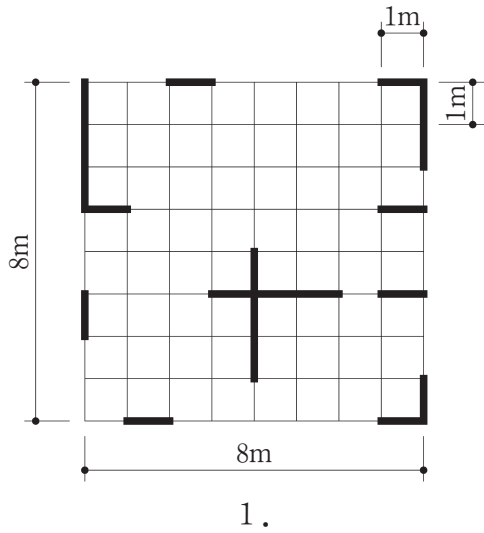


[No. 8] 図のような木造の梁A、B及びCの端部におけるせん断強さの大小関係として、正しいものは、次のうちどれか。ただし、全ての梁の材質及び幅は同じものとする。

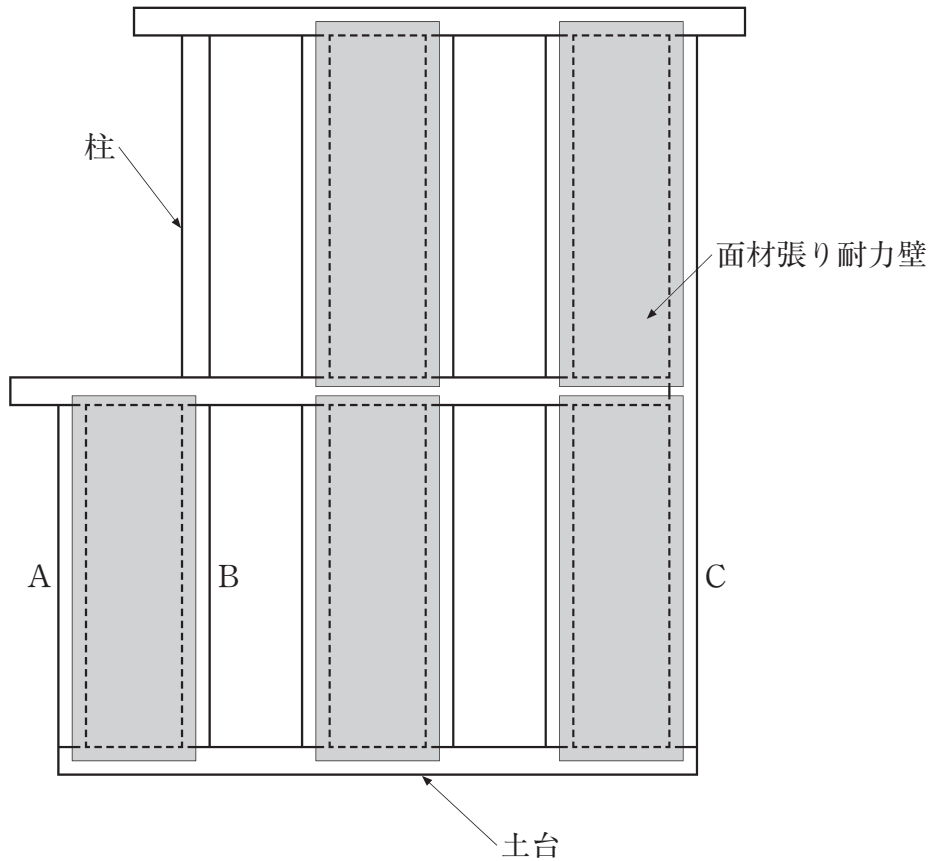
1. $A > B = C$
2. $A = B > C$
3. $A = C > B$
4. $C > A = B$
5. $C > B > A$



[No. 9] 木造軸組工法による平家建ての建築物において、図に示す平面の耐力壁(図中の太線)の配置として、最も不適当なものは、次のうちどれか。ただし、屋根は日本瓦葺(地震力に対する必要壁率は 15 cm/m^2 である。)とし、全ての耐力壁の倍率は1とする。

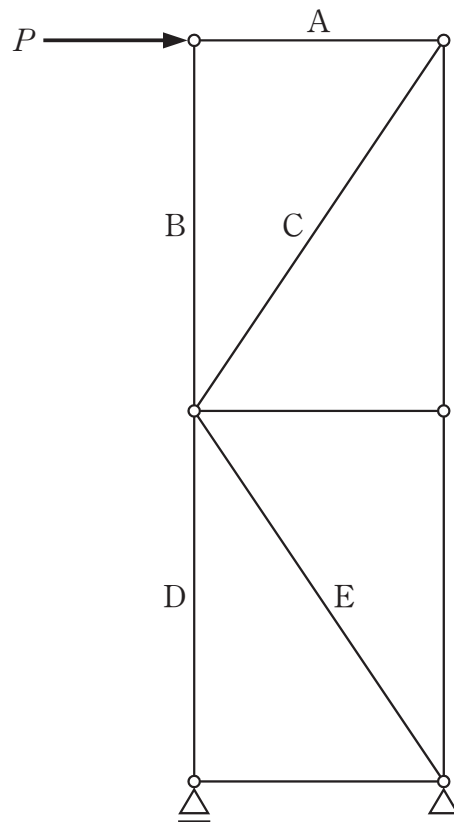


[No. 10] 図のような2階建ての木造建築物の耐力壁の配置において、水平力を受けたときに柱A～Cの脚部に生じる引抜き力の大小関係として、正しいものは、次のうちどれか。ただし、耐力壁は面材張り(■部分)で倍率は2.5とする。



1. $A > B > C$
2. $A > C > B$
3. $A = C > B$
4. $C > A > B$
5. $C > B > A$

[No. 11] 図のような軸組における部材A～Eについて、水平力 P が作用することによって生じる軸力に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。



1. 部材Aには、圧縮力が生じる。
2. 部材Bには、軸力が生じない。
3. 部材Cには、圧縮力が生じる。
4. 部材Dには、引張力が生じる。
5. 部材Eには、圧縮力が生じる。

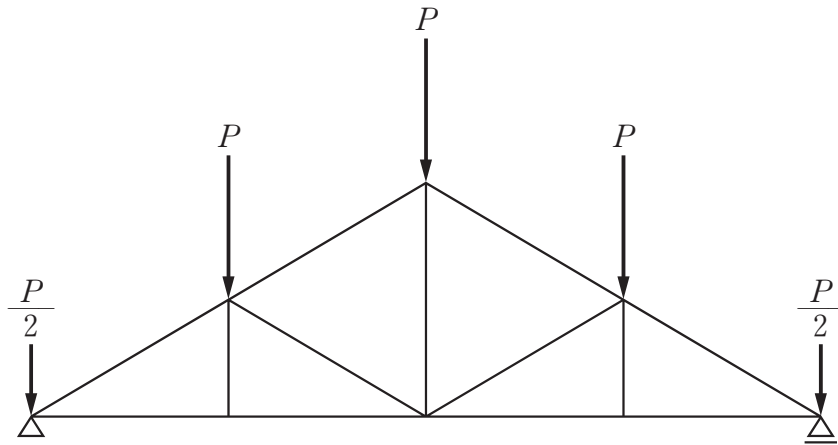
〔No. 12〕 次の木造軸組工法による建築物の軸組のうち、**壁倍率が最も大きいもの**はどれか。

1. 貫として、断面寸法が1.5 cm×9 cmの木材を60 cm間隔で5本設け、その貫に構造用合板を所定の方法によって張り付けた壁
2. 受材として、断面寸法が3 cm×4.5 cmの木材をN75 釘(30 cm間隔)で軸組に打ち付け、その受材に構造用合板を所定の方法によって張り付けた壁
3. 落とし込み板として、断面寸法が3 cm×15 cmの木材を柱と柱の間に所定の方法によって接合して積み上げた壁
4. 断面寸法が4.5 cm×9 cmの木材を、30 cm間隔で所定の方法によって縦横に組んだ格子壁
5. 中塗り土の塗り厚さを5.5 cmとした両面塗りの土塗壁を、所定の貫・小舞竹等を用いて施工した壁

〔No. 13〕 木造建築物の小屋組に関する次の記述のうち、**最も不適当なもの**はどれか。

1. 京呂組は、柱のない位置で小屋梁を支えることができるので、住宅に用いることが多い。
2. 小屋貫は、小屋組の変形を防ぐために、2本以上の小屋束を貫いて配置される水平材である。
3. 洋小屋組は、比較的小さな断面の部材により構成され、和小屋組に比べて、張り間(スパン)の大きい建築物に適している。
4. 折置組は、小屋梁を柱で直接支える構法である。
5. 合掌造りには、棟持ち柱式、天秤梁式びんなどがある。

[No. 14] 図のような荷重が作用する小屋組(洋小屋組)に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。



1. 方づえには、圧縮力が作用する。
2. 合掌には、引張力が作用する。
3. 陸梁^{ろく}には、引張力が作用する。
4. 真束には、引張力が作用する。
5. 吊束^{つり}には、圧縮力も引張力も作用しない。

[No. 15] 次の木造建築物の2階床組のうち、床の水平剛性が最も高いものはどれか。ただし、火打材は用いないものとし、受材・根太等への釘打ちはそれぞれ所定の方法によるものとする。

1. 幅 180 mmの挽板^{ひき}を、落とし込みの根太(間隔 303 mm)に打ち付けたもの
2. 構造用合板(厚さ 12 mm)を、転ばしの根太(間隔 455 mm)に打ち付けたもの
3. 構造用合板(厚さ 12 mm)を、落とし込みの根太(間隔 455 mm)に打ち付けたもの
4. 構造用合板(厚さ 24 mm)を、根太を設けず、梁・桁に直接、川の字打ちとしたもの
5. 構造用合板(厚さ 24 mm)を、根太を設けず、梁・桁・受材に直接、四周打ちとしたもの

〔No. 16〕 枠組壁工法による2階建ての建築物に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。ただし、構造計算は行わないものとする。

1. 2階の耐力壁の直下に耐力壁を設けなかったため、当該耐力壁の直下の床根太を構造耐力上有効に補強した。
2. 耐力壁線相互の距離を12mとし、耐力壁線により囲まれた部分の水平投影面積を80m²とした。
3. 長さ5mの耐力壁線に幅3mの開口部を設けた。
4. 耐力壁の上部には、耐力壁の上枠と同寸法の断面を有する頭つなぎを設けた。
5. 多雪区域内に建つ建築物であったため、地震力に対する必要壁率の値は、垂直積雪量に応じた値とした。

〔No. 17〕 木造軸組工法による2階建ての建築物の構造計画に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 構造計算によって構造耐力上安全であることを確認したため、床組及び小屋ばり組の火打材を省略した。
2. 吹抜けを有した建築物の2階の壁量計算用の床面積は、2階の床面積に吹抜け部分の面積を加えたものとした。
3. 2階の耐力壁の位置と1階の耐力壁の位置は、市松状になるように配置した。
4. 片面に同じボードを2枚重ねて釘打ちした耐力壁の倍率を、そのボードを1枚で用いたときの耐力壁の倍率の2倍とした。
5. 敷地が軟弱な地盤であったため、建築物に配置する耐力壁の量を増やした。

〔No. 18〕 木造軸組工法による2階建ての既存建築物の耐震性を向上させる方法として、一般に、最も効果の低いものは、次のうちどれか。

1. 1階床組の大引と根太を、接合金物によって緊結した。
2. 耐力壁が設置された下屋の屋根下地材を、小幅板から構造用パネルに張り替えた。
3. 大きな吹抜け部分を、構造用合板を張り付けたキャットウォークにより補強した。
4. 耐力壁を構成する柱の劣化部分を根継ぎにより交換し、当該接合部を接合金物により補強した。
5. 足固めのない玉石基礎であったので、地盤面上に一体の鉄筋コンクリート造の底盤を設け、足固め・接合金物等を用いてその底盤と柱脚部とを緊結した。

〔No. 19〕 木造建築物の各部における鉛直荷重による力の流れとして、最も不適當なものは、次のうちどれか。

1. 屋根荷重(和小屋寄棟)
野地板 → 配付け垂木 → 隅木 → 母屋^{もや} → 小屋束 → 飛梁 → 軒桁
2. 屋根荷重(洋小屋)
野地板 → 垂木 → 母屋^{もや} → 合掌 → 敷桁 → 陸梁^{ろく} → 柱
3. 屋根荷重(和小屋)
野地板 → 垂木 → 母屋^{もや} → 小屋束 → 小屋梁 → 柱
4. 2階天井荷重
天井板 → 野縁 → 野縁受 → 吊木^{つり} → 吊木受^{つり} → 小屋梁
5. 2階床荷重(組床)
床板 → 根太 → 小梁 → 大梁 → 胴差 → 柱

〔No. 20〕 木材の一般的な性質に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 針葉樹は、一般に、加工がしやすく構造材や造作材に適している。
2. ある一定以上の荷重を継続して木材に加えた場合、時間の経過とともに変形が増大する現象を、クリープという。
3. 断面が大きい木材を燃焼させる場合、木材の燃焼面から炭化するが、その速度は、1分間に0.6 mm程度である。
4. 木材の水分の吸収速度は、一般に、板目面より柃目面のほうが速い。
5. 木材の気乾含水率(大気中に放置した状態で乾燥させた木材の含水率)は、我が国では約15%である。

〔No. 21〕 木材の一般的な強度に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 含水率が繊維飽和点以下であれば、含水率が減少しても、木材の強度は、ほぼ一定である。
2. 木材の繊維方向、半径方向及び接線方向の強度の比は、20：2：1程度である。
3. 木材の繊維方向の圧縮、引張り及びせん断の基準強度の大小関係は、一般に、圧縮 > 引張り > せん断である。
4. 木材のめり込みに対する基準強度は、樹種によって規定されている。
5. 比重の大きい樹種は、一般に、比重の小さい樹種に比べて、圧縮強度が大きい傾向にある。

[No. 22] 木質材料に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 「集成材の日本農林規格」において、構造用集成材には、構造物の火災時でも高度の接着性能を要求される環境等で使用できるものがある。
2. CLT(直交集成板)は、挽板^{ひき}を幅方向に並べたものを繊維方向が直交するように積層接着したものである。
3. OSB(構造用パネル)は、木材の切削片を配向させた層を、互いに直交するように積層接着したボードである。
4. 木質断熱複合パネルは、製材、集成材等の木材を使用した枠組に構造用合板等を接着剤により複合構成したパネルである。
5. 枠組壁工法構造用たて継ぎ材は、枠組壁工法構造用製材をフィンガージョイントによって長さ方向に接着したものである。

[No. 23] 木造建築物の腐食・防腐・防蟻等に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 接合部において、接合金物の腐食による強度低下を防止するためには、溶融亜鉛めっき等の防錆^{せい}処理を施した金物を使用する。
2. 建築物における木材の腐朽が最も現れやすい部分は、我が国では、一般に、建築物の南面である。
3. 集成材は、積層する前のラミナに加圧式保存処理として木材保存剤を注入することにより、全層に木材保存剤を浸潤することができる。
4. 薬剤を木材の表面に塗布する防腐処理は、一般に、その効果の持続期間が短い。
5. イエシロアリは、乾燥した木材であっても食するので、建築物の小屋組のような上部の構造材にまで被害が及ぶことがある。

〔No. 24〕 コンクリートに関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. コンクリートの圧縮強度の判定は、一般に、材齢 28 日の試験結果によって行う。
2. 常温時におけるコンクリートの線膨張係数は、鉄筋の線膨張係数とほぼ等しい。
3. コンクリートは、一般に、水に対するセメントの量が多くなると、強度は低くなる。
4. 普通コンクリートの気乾単位容積質量は、2.2～2.4 t/m³である。
5. AE剤などの混和剤は、ワーカビリティの向上など、コンクリートの品質を改良する目的で使用される。

〔No. 25〕 建築材料に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. ステンレス鋼は、主成分であるアルミニウムに、クロムやニッケルなどを配合した合金である。
2. 磁器質タイルは、吸水率が小さいので、床材及び外装材としても用いられる。
3. シーリングせっこうボードは、防水処理を施したものであり、台所、洗面所等の湿潤な場所の下地材として用いられる。
4. 珪藻土^{けいそう}を素材とした左官材料は、一般に、耐火性及び断熱性に優れている。
5. 吹付け硬質ウレタンフォームは、施工現場で発泡させて使用する断熱材である。

学科IV（建築施工）

〔No. 1〕 工事現場の安全確保に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 高さが6 mの箇所で作業を行うに当たり、安全帯を取り付けるための設備を設け、安全帯を使用させた。
2. 高さが2 mの作業場所から不要な資材を投下するに当たり、資材が飛散するおそれ
がなかったので、投下設備を設けなかった。
3. 高さが5 mの単管足場の組立て作業に当たり、作業主任者を選任した。
4. 高さが9 mの登り桟橋において、踊り場を高さ3 mごとに設けた。
5. 単管足場における建地の間隔については、桁行方向1.5 m、梁間方向1.85 mとした。

〔No. 2〕 木造2階建て住宅の建築工事現場における仮設工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 遣方の水杭の頭は、衝撃によるゆがみを容易に発見できるように、矢はずに加工した。
2. 単管足場の地上第一の布の位置は、地面から2 mの高さとした。
3. ブラケット一側足場の建地の間隔を1.8 mとし、建地間の最大積載荷重を150 kgとした。
4. 地面からの高さが2.1 mの位置に設ける単管足場において、作業床の幅を30 cmとした。
5. 足場板については、長手方向の支点の上で重ね、その重ねた部分の長さを30 cmとした。

〔N o. 3〕 木造2階建て住宅における土工事・地業工事等に関する次の記述のうち、**最も不適当なものはどれか。**

1. 敷地の地盤調査に、スウェーデン式サウンディング試験(SWS試験)を採用した。
2. 砂利地業で再生砕石を使用したので、ソイルコンパクターによる締固めを1回とした。
3. 地盤が比較的良好であったので、割栗とせず、砕石による地業とした。
4. 根切りの幅及び深さは、根切り底の仕上げを平滑に施工した後、工事監理者が確認した。
5. 基礎の底面を平らに均し、基礎の墨出しをするために捨コンクリートを打設した。

〔N o. 4〕 木造2階建て住宅における基礎工事に関する次の記述のうち、**最も不適当なものはどれか。**ただし、建築物は一般地域内に建つものとする。

1. べた基礎の根入れ深さを、120 mmとした。
2. べた基礎の底盤厚さを、120 mmとした。
3. 布基礎の床下に防湿コンクリートを打設するに当たり、その厚さを50 mmとした。
4. 基礎断熱とするに当たり、基礎と土台の間には、気密パッキンを用いた。
5. 基礎を貫通して設ける配管スリーブは、基礎にひび割れが生じない部分で、雨水が流入しない位置に設けた。

〔N o. 5〕 木造住宅における木材の一般的な使い方に関する次の記述のうち、**最も不適当なものはどれか。**

1. 外壁の柱は、室内側を腹にして使用した。
2. 鴨居は、木裏を上端にして使用した。
3. 大引は、腹を上端にして使用した。
4. 室内の床仕上げに用いる縁甲板は、木表を下端にして使用した。
5. 梁は、背を上端にして使用した。

〔No. 6〕 木材の木取り等とそれを使用する部位との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 心持ち材 ————— 土台
2. 板目材 ————— 敷居
3. 四方柱材 ————— 独立柱
4. 杢^{もく}目材 ————— 天井板
5. 絞り丸太 ————— 小屋梁

〔No. 7〕 木造軸組工法による2階建て住宅の施工順序として、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 屋根下地 → 床下地 → 壁下地
2. 垂木 → 広小舞 → 野地板
3. 土台 → 通し柱 → 桁・胴差
4. 筋かい → 間柱 → 筋かい金物
5. 大引 → 床束 → 根太

〔No. 8〕 木造軸組工法における部材と使用する樹種との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 母屋^{もや} ————— べいつが
2. 梁 ————— まつ
3. 桁 ————— きり
4. 間柱 ————— すぎ
5. 大引 ————— ひのき

〔No. 9〕 木造2階建て住宅における合板等の施工に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 構造用面材による床組の補強において、根太、床梁及び胴差の上端高さを同じとしたので、根太の間隔を455mmとした。
2. 柱と土台との接合部を山形プレートで補強する箇所については、先に取り付けた山形プレートの上に構造用合板を重ねて打ち付けた。
3. 大壁造の構造用面材として、厚さ9mmの構造用合板を用いた。
4. 床下地材として、厚さ18mmのパーティクルボードを用いた。
5. 大壁造の面材耐力壁において、せっこうボードを下地に釘留めするに当たり、釘の打込み間隔を100mmとした。

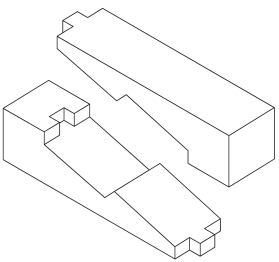
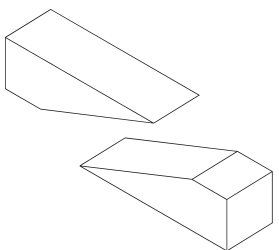
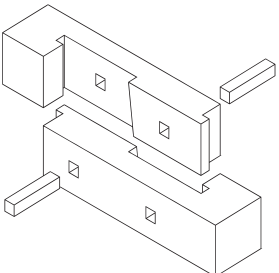
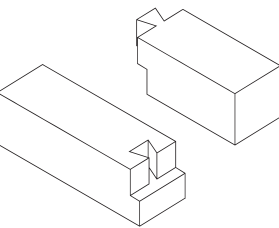
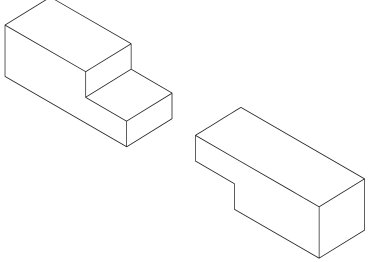
〔No. 10〕 木造軸組工法において用いる接合金物(表示記号)とその接合箇所との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 火打金物(HB) ————— 床組の隅角部
2. ホールダウン金物(S-HD15) ——— 1階の管柱と2階の管柱
3. かど金物(CP・T) ————— 柱と土台
4. くら金物(SS) ————— 小屋梁と軒桁
5. 折曲げ金物(SF) ————— 垂木と軒桁

〔No. 11〕 木工事において、各部材の接合部に用いられる仕口として、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 土台と大引 ————— 大入れ蟻掛け
2. 土台隅角部の取合い部 ——— えり輪入れ小根ほぞ差し
3. 柱と2階床梁 ————— 傾ぎ大入れ短ほぞ差し
4. 小屋梁と軒桁 ————— かぶと蟻掛け
5. 通し柱と胴差 ————— 蟻落し

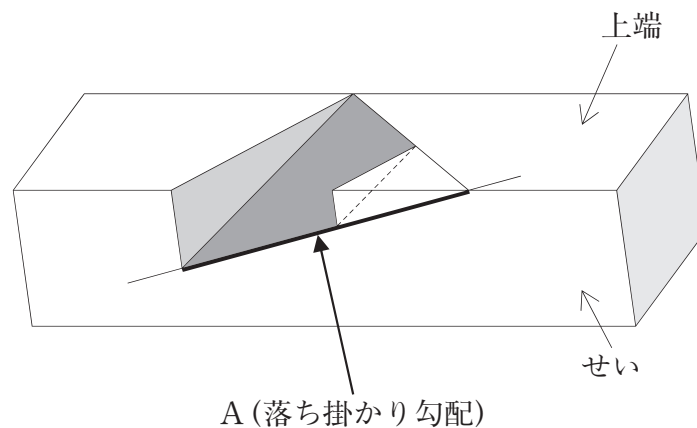
[No. 12] 木造軸組工法における各部材の接合部に用いられる継手とその名称との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

図	名称
1. 	金輪継ぎ
2. 	そぎ継ぎ
3. 	追掛け大栓継ぎ
4. 	腰掛け蟻継ぎ
5. 	相欠き継ぎ

[No. 13] 規矩術に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

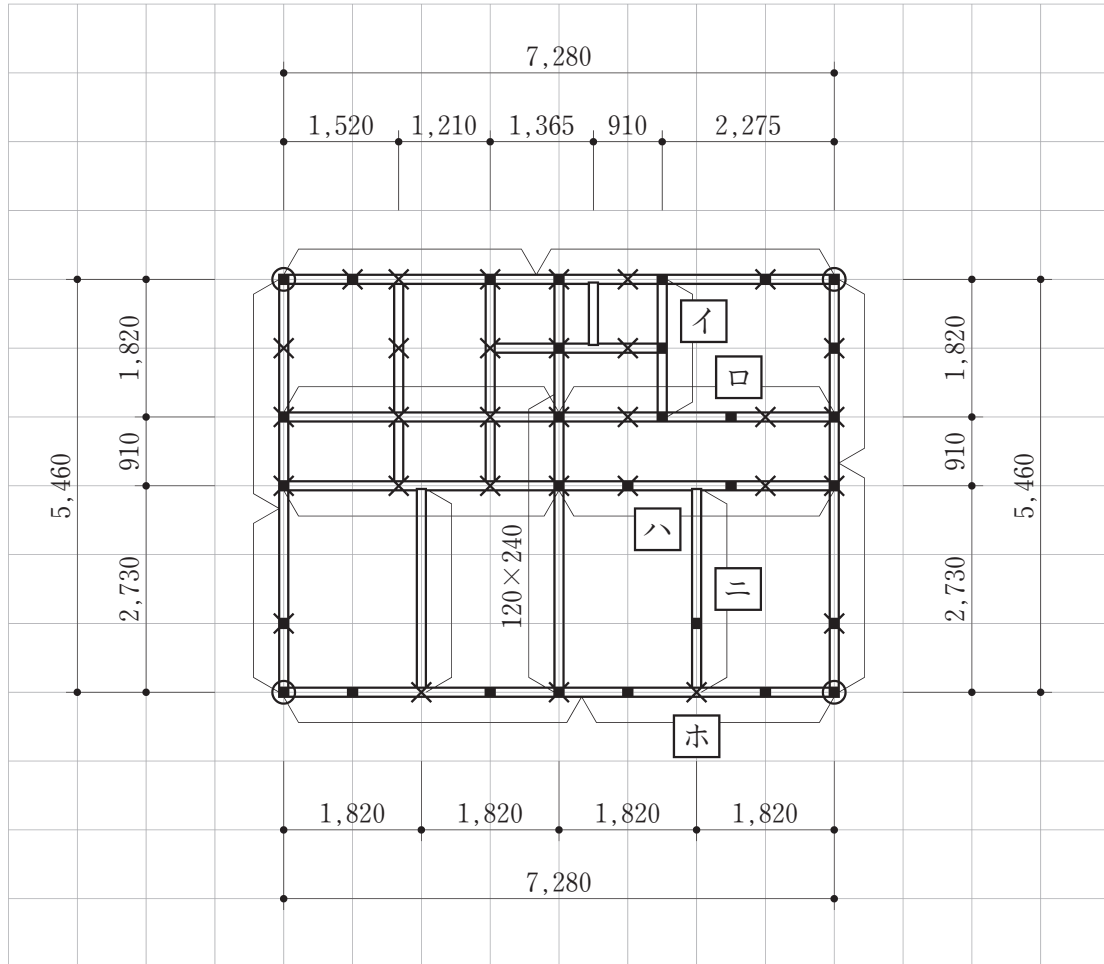
1. 隅木の長さの基点は、出中・入中の墨のうち、出中である。
2. 配付け垂木のせい(側面)の墨は、平勾配の返しである。
3. 一辺が 10 cm の正方形の対角線は、さしがねの裏目の 10 cm になる。
4. 「峠」は、「垂木の下端」と「桁、母屋等の心墨」との交点のことである。
5. 棒隅は、隅木が桁に対して 45° の位置に納まる隅である。

[No. 14] 図は、隅木の落ち掛かり仕口の墨を示したものである。図中の A の勾配として、正しいものは、次のうちどれか。



1. 中勾勾配
2. 倍勾配
3. 平勾配
4. 矩勾配
5. 平勾配の半勾配

[No. 15] 図のような木造2階建て住宅の2階床伏図において、部材「イ」～「ホ」とその断面寸法(幅mm × せいmm)との組合せとして、最も不適當なものは、次のうちどれか。ただし、建築物は多雪区域以外の一般地域内に建つものとし、根太及び火打梁の表示は省略している。また、添え板(枕梁)等はないものとする。

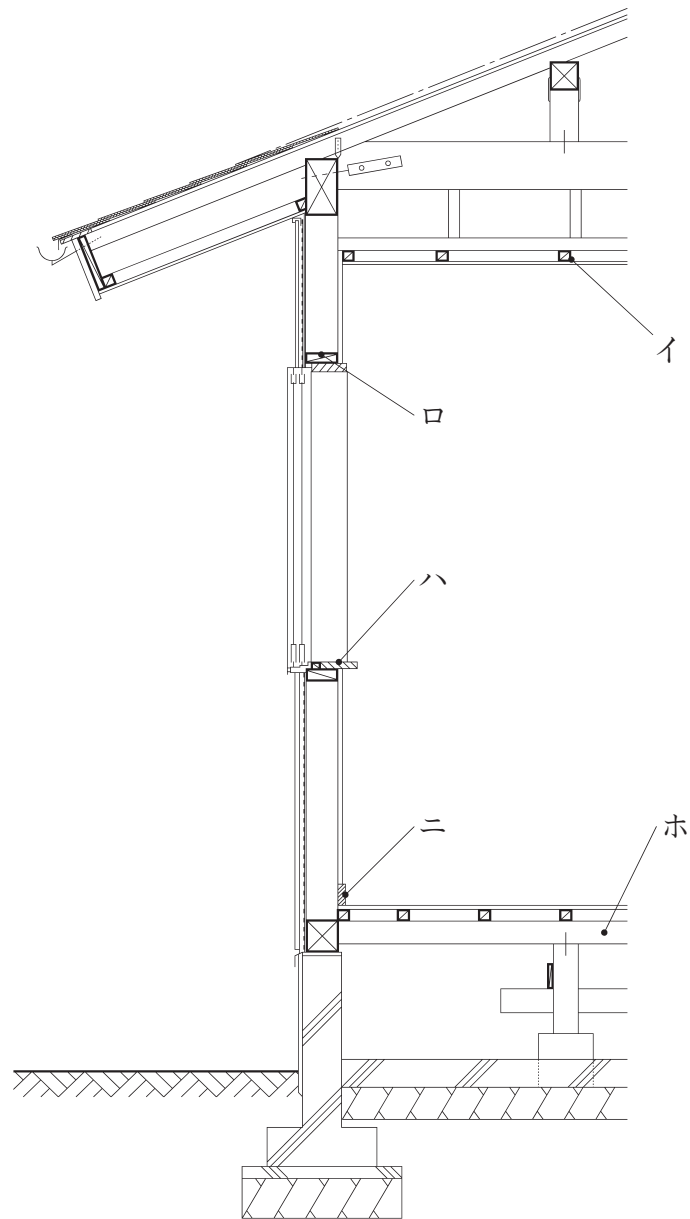


(単位：mm)

凡例	表示記号	通し柱	1階の管柱	2階の管柱	1階と2階が重なる管柱	胴差・2階床梁	
						(正角材)	(平角材)
		●	×	■	⊗	—	—

1. イ ————— 120 × 180
2. ロ ————— 120 × 210
3. ハ ————— 120 × 210
4. ニ ————— 120 × 270
5. ホ ————— 120 × 180

[No. 16] 図のような木造平家建て住宅の矩計図における部材イ～ホの名称として、最も不適当なものは、次のうちどれか。



- 1. イ ————— 野縁
- 2. ロ ————— 窓まぐさ
- 3. ハ ————— 窓台
- 4. ニ ————— 幅木
- 5. ホ ————— 大引

〔No. 17〕 木工事における部材の墨付けに使用する合印とその名称及び説明との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

	合 印	名 称	説 明
1.		切り墨印	部材の切断部分を示す。
2.		間柱心印	土台等において、間柱の心の位置を示す。
3.		心墨印	部材幅の中心や柱間隔の位置を示す。
4.		水墨印	水平を示す。
5.		峠墨印	小屋組部材ごとの最高部を示す。

〔No. 18〕 木造住宅における屋根工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 瓦棒葺の釘留めに当たって、瓦棒(心木)を、垂木の位置と一致させた。
2. 庇^{ひきし}の下葺に用いるアスファルトルーフィングは、壁面との取合い部において、その壁面に沿って 250 mm以上、かつ、雨押え上端より 50 mm以上立ち上げた。
3. 硬質塩化ビニル製の軒どいの受金物は、取付け間隔を 600 mm内外とし、鼻隠しに取り付けた。
4. 和形粘土瓦葺の軒瓦及び袖瓦は、一枚ごとに釘で留め付けた。
5. アスファルトルーフィングの棟部分の張付けは、150 mmの左右折り掛けとした。

〔No. 19〕 木造住宅の左官工事及びタイル工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 木毛セメント板下地へのせっこうプラスタ[・]ー塗りの中塗りは、モルタルによる下塗りを十分に乾燥させてから行った。
2. モルタルに用いる砂は、中塗り用を荒目のもの、上塗り用を細目のものとした。
3. 外壁のモルタル塗りにおいて、モルタルの1回の塗厚を15 mm程度とした。
4. 壁のタイルの改良積上げ張りにおいて、タイルの周辺から張付け用モルタルがはみ出すまで、たたき締めた。
5. 壁のタイルの改良圧着張りにおいて、張付け用モルタルの調合は、容積比でセメント1に対して砂2とした。

〔No. 20〕 塗装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. せっこうボードの素地ごしら[・]えは、汚れや付着物を除去し、パテかいや研磨紙ずりを行った後、全面にシーラーを塗布した。
2. クリヤラッカーは、速乾性の塗料であるので、吹付け塗装とした。
3. モルタル面には、合成樹脂エマルジョンペイントを2回塗りした。
4. 吹付け塗装において、スプレーガンの吹付けの速度が1秒間に90 cm程度となるように行った。
5. 木部の節止めには、セラックニスを用いた。

〔No. 21〕 木造住宅の建具工事及び内装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 戸ぶすまのクロス張り下地に用いる普通合板は、日本農林規格(JAS)による2類のものとした。
2. 木製フラッシュ戸の表面材に用いる普通合板は、厚さ2.5mmのものとした。
3. 木製建具の保管は、格子戸は立てかけとし、フラッシュ戸は平積みとした。
4. せっこうボードを木製下地に釘打ちするに当たり、釘の長さは、そのボードの厚さの3倍とした。
5. フローリングの施工において、割付けは室の中心から行い、寸法の調整は壁際で行った。

〔No. 22〕 木造住宅の設備工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 換気用ダクトは、屋内から屋外に向かって、先上がり勾配となるように取り付けた。
2. 配管の施工において、管と管、管と壁などの距離の測定は、管の中心線を基準として行った。
3. 給水管は、水道用硬質塩化ビニルライニング鋼管とした。
4. 排水ますのふたは、プラスチック製のものとした。
5. 汚水ますには、インバートますを用いた。

〔No. 23〕 木工事に関する施工用語の説明として、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. ひかる ————— 部材の取合い部において、一方の形状を他方へ写し取ること
2. 木殺し ————— 木材を屋外に積み重ねて、自然乾燥させること
3. 乱継ぎ ————— 複数の部材の継手位置が一直線上に並ばないように配置すること
4. プレカット ———— コンピュータ制御された機械で木材を加工すること
5. 大矩^{おおがね} ————— 辺の比が3：4：5で作られた大きな三角形の定規

〔No. 24〕 建築積算に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 設計数量は、設計図書に表示されている個数や設計寸法から求めた正味の数量である。
2. 複合単価は、材料費や労務費など、二種類以上の費用を合わせたものの単価である。
3. 工事原価は、一般管理費と純工事費とを合わせたものである。
4. 足場などの仮設工事に係る労務費は、直接工事費に該当する。
5. 屋外整理清掃費は、共通仮設費に該当する。

〔No. 25〕 木造住宅の工事請負契約に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 工事請負契約書には、注文者が工事の完成を確認するための検査の時期を記載しなければならない。
2. 工事請負契約書には、建築確認の確認済証の交付された年月日を記載しなければならない。
3. 工事請負契約書には、天災その他不可抗力による損害の負担に関する定めを記載しなければならない。
4. 住宅建設瑕疵担保責任保険契約の締結に関する定めをするときは、工事請負契約書にその内容を記載しなければならない。
5. 工事中の建築物に火災保険を掛ける者は、受注者である。

